

教育開発支援センター 2011年度 プロジェクト紹介

教育開発支援センターでは、プロジェクト型で教育制度に関する企画立案や教育実践に関する研究を推進しています。今年度進行中の2つのプロジェクト「TSネットワーク」「ICT活用授業の普及活動」をご紹介します。

TSネットワーク

TSネットワークとは、Teaching AssistantとStudent Assistantの頭文字をとって名付けられたプロジェクトです。メンバーは、専任教員1名、事務職員2名、研究員1名で構成されています。本プロジェクトは、平成17年度から試行的に実施している「TAを活用した授業」の実施結果を検証し、教育の質を向上させ、TA制度の実質化を目指すことをその目的としています。具体的には下記の2つの課題を検討することで、プロジェクトの目的を達成することを目指しています。

1) TA制度の実質化

教員へのヒアリング調査、TAへのアンケート及びヒアリング調査によるTAの制度改善、内規策定

2) TAを活用した授業の質向上を目指した取り組み

TA研修の企画・運営、TA通信の発行等

1) TA制度の実質化

2010年度は、TAを活用する教員へのインタビュー調査、TAへのインタビュー、アンケート調査、ならびに過去に実施されたTA制度の報告書

を元に、現在試行的な取り組みとして実施しているTA制度の評価を行いました。そして、今年度は調査結果を元に、TA制度を実質化させるための制度を設計していくことを検討しています。

2) TAを活用した授業の質向上を目指した取り組み

TAは日々の業務や業務に対するアドバイスを教員から受け、TAとして成長している姿が見受けられましたが、それぞれが培ってきた知を共有する場が十分にありませんでした。そこで、2010年度からTA研修を実施しました。研修ではTAが授業を通じて導き出した工夫や改善策を共有し、TAが自己の活動をふりかえり、さらに質の高い活動を実施していくための機会とするようにデザインしています。

また、TAが参加した効果的な授業実践をより多くの先生、TA、受講生に知っていただくために、TA通信の発行を始めました。TA通信では毎月一人のTAがTA活動を通じて学んだことや学習効果が高いと感じたツールや取り組みについて紹介しています。ぜひご覧ください。

(<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ta05.html>)

(教育推進部 岩崎千晶)

ICT活用授業の普及活動

eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループによる昨年末のICT活用授業の実態を踏まえると、教員のICT活用度及びICTリテラシー・レベルはまだ発展途上であると言えます。本学のように学生数も多く、どうしても多人数教室での授業が多くなってしまう状況では、ICTを活用することで授業の効率化を図り、教員・学生間のフェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションやフィードバックが必要な部分に出来る限り時間を割り当てられるような工夫が必要です。また、ICTを活用することで、学生同士のコミュニケーションの機会も増えてきます。

そこで、本年度より3年間をかけて、本学の多人数授業形態を反映した授業効率及び授業運営効率を向上させるための工夫を共有・共感していただくことを意図し、最先端のICTを活用した授業のショーケース・モデルを作成し、山本と岩崎の両名がICT活用型授業のコンシェルジュとして以下のICT活用型授業の普及活動を行っていきます。

なお、ここでいう「ICT」とは、教育の効率化を目指した最先端のITおよびシステムすべてを指すものとします。

【授業におけるICT活用の普及についての活動内容(構想)】

1. ICTリテラシー基準および自己評価尺度の作成
2. 授業でのコミュニケーションをスムーズに行うためのICT活用ワークショップ・講習会の開催
3. ICT活用事例と成果の可視化を示したニュースレター・ICT活用カードの作成・配布
4. ICTツール各種の簡易利用マニュアルの作成・配布
5. 教材コンテンツ作成のためのアドバイス
6. ICT活用授業のコンシェルジュ

【お知らせ】

まず、教室内でのグループ活動で役に立つツール(「ライティング・シート」および「クリッカー」)を活用した学生参加型のインタラクティブ授業についてワークショップを計画中です。

(教育推進部 山本敏幸)

From センター長

隣のFDは赤い!?

「隣の花は赤い」ということわざがある。同じ用法のことわざ「隣の芝生は青い」がある。このことわざの意とするところは、みなさんご存知のように「他人のものは自分のものよりよく見えて、羨ましい」である。「自分のものよりよく見える」という点がこのことわざの肝ともいえるべき部分であろう。

昨今、FD関連の行事がますます活発に開催されるようになった。立場上、他大学等のFDに関する取り組みをテーマにした講演

会や発表会に参加する機会が多いのだが、やはり、参加すると他の大学の取り組みは非常に効果的で、成果が上がっているように見え、思わず大学に持ち帰って実践したくなる。しかし、帰校して冷静に検討してみると、本学で既に取り組んでいるものと大差ない場合や、報告した大学との規模や体制が明らかに異なっており実践困難な場合もかなり多い。どうも隣のFDは赤いようである。

「隣のFDは赤い」。この落とし穴にはつい

つい陥りやすく、しかし、一度陥って実践を始めてしまってからこのことに気づいても遅いのである。走り出してしまった取り組みをとどめることは困難がつきまとう。

FDを行う組織は往々にして、組織が求められる使命の性格上、新規性のある取り組みの実践を求めてしまう傾向にある。果敢に挑戦し続けることも必要ではあるが、「隣のFDは赤い」を心に留め置くことも必要ではないだろうか。

教育開発支援センター長
化学生命工学部教授 池田 勝彦